

科学者とナチズム－歴史と反省

増田 芳雄

はじめに

1995年は第2次世界大戦終了50年に当たり、欧米諸国では50年記念式典が開かれ、我が国では「国会決議」論議が展開された。この第2次世界大戦、あるいは日本を中心とした日中戦争（当時は支那事変と公式命名された）、太平洋戦争（当時は大東亜戦争と公式命名された）では、前線で戦った兵士たち、戦場となった土地の住民はもちろん、多くの非戦闘員が犠牲になった。しかし、教育機関の研究者や教員のいろいろな形の犠牲については多くは知られていない。我が国でも、早くは中学生が少年飛行兵などに志願し、あるいは学徒動員で在学中の前途有為な青年あるいは若い研究者や教員たちが前線に送り出され、すぐれた人材を多く失っている。また、研究、思想の自由も失われ、我が国における学問の発展が著しく阻害された。しかしこの時代、大部分の日本国民が自らを国家の「被害者」と認識せず、むしろ進んで「軍国国家」に協力していた部分が大いにあったことは否めない。また、新聞をはじめすべての公私の機関が当時の政府の政策に協力し、“軍国日本の自爆”を導いた（猪木正道，1995）。

日本の枢軸国であったドイツ、オーストリアも戦争と敗戦によって多くの損害を受けたが、ヨーロッパには極めて特異的な歴史的背景があり、我が国の場合とは異なった戦争被害の様相を呈している。とくに1933-45年、ナチス政権下における科学研究の停滞は優秀なユダヤ系科学者の追放によるところが大きかった。この追放は勿論ナチス第三帝国の方針によっていたことではあるが、嫉妬心からナチスの方針に同調し、むしろその政策を利用して優れた人々を追い落としたドイツ人同僚学者による破廉恥な行為という側面が大いにあった。しかし彼らは、ユダヤ人を追放することによって彼ら自らが学問の自由を放棄したともいえる。のちに述べるように、1938年にドイツに併合されるまでは比較的自由にユダヤ系科学者が活躍したオーストリアの学問は、ドイツの巻きぞえにされた被害者であったとも言える。

長く神聖ローマ帝国皇帝の地位を占め、カトリックの精神を保って全ドイツに君臨してきたハプスブルク（Habsburg）帝国はドイツ統一の覇者となるはずであったが、プロテスタント精神のプロシャとの戦いにあっけなく敗れ、その結果オーストリアーハンガリー帝国（ハプスブルク二重帝国）としてプロシャドイツ帝国の風下の地位に甘んじるに到った。この二重帝国は多民族国家で、このため多くの問題を抱え、皇后は暗殺され、そして1914年には皇太子夫妻の暗殺によって第1次世界大戦の端緒をつくるに至る。同時に、多くの人種を抱えたこの国家は、不均一な国家体制のなかにある種の自由と調和を保っていた。したがって、統一を遂げたドイツとは国家としてかなり異質なもので、その違いは現在でも両国を訪れると感じとるこ

とができる。

筆者の専門分野である「植物生理学」を確立した19世紀ドイツの植物学者ザックス (Julius Sachs, 1832–1897) は、「歴史を見ることなく科学は語れない」と言った。私たちの生きてきた20世紀はまさに変動の世紀で、自然科学はとくに思いも及ばぬ質的変換を遂げてきた。そして、それはまた世界の激動の波に翻弄されながら世紀末を迎えている。このことを改めて省みすることは自然科学のこれからの発展に必要なことと筆者は考えている。歴史について専門家でないことを省みず、科学と世界変動が密に相互作用した一つの例として、科学者とナチズムとの関係について本稿で私見を述べたい。1933–45年のナチズム時代におけるオーストリアの状況をまずとりあげ、つぎに、ドイツについて歴史的考察をしたい。

1. ユダヤ系教員の追放

ドイツ圏で最古の大学の一つとして知られるウィーン大学 (Universität Wien) は630年の歴史を誇り、その長い歴史の間、数多くの優れた学者を教授として迎え、あまたの人材を排出してきた。環状道路に沿った Schottentor にある大学本館に入ると、中庭が目につく。中央奥にニンフの泉 (Kastalia-Brunnen) があり、中庭を取り巻く回廊には教授であったこれら碩学の胸像やレリーフがずらりと並び、訪れるものを圧倒する。146名の碩学のなかには、われわれ日本人がよく知る学者も多く、植物学の分野の泰斗たちの顔も見える (資料1)。この中にはまた、ユダヤ系の教授が少なからず含まれている。

ウィーン大学の記録によると (資料2)、1938–1945年の間にユダヤ系の教授と講師 (Dozent) の45%、すなわち半数近くが追放された。その内訳は、教授 (Professor) が82名 (37%)、講師が233名 (49%) である。それらは、神学部7、法学部45、医学部77、哲学部98など、なかには理論物理学者でノーベル賞受賞者も入っていた。さらに、精神分析学で有名なフロイト (S. Freud) らが居た。これらのユダヤ系の教員は追放後亡命したり、強制収容所に移されたりした。また自殺者も数人を数えた。こうして半数近くの教員が去り、ウィーン大学における研究と教育が甚大な損害を受けたことは言うまでもない。亡命科学者のおもな亡命先はアメリカ90、イギリス25、その他の国35であった。ウィーン大学学生数も四分の一以上がユダヤ人だったので (大沢武男, 1995)、当然教員と同様の状況におかれたと思われる。1913年の統計によると、ウィーン大学におけるユダヤ人学生の割合は医学と法経に多く、前者で約29パーセント、後者で20.5パーセント、また哲学が16.3であった (村瀬興雄, 1962)。

ヒトラー (Adolf Hitler, 1889–1945) が1933年、ドイツで政権を取り、ナチス第三帝国を樹立したのち、1938年、つまり第2次世界大戦開始の前年、自らの母国オーストリアをドイツ帝国に併合した。これをアンシュルス (Anschluss) とよぶ。北オーストリアのリンツに近い町ブラウナウ (Braunau) に1938年3月、「解放者」 (Der Befreier) として進駐し、「故郷に錦を飾った」ヒトラーの誇らしげな姿と、彼を歓迎する熱狂的な住民たちの様子が「故郷におけるヒトラー (Hofmann: Hitler in seiner Heimat, 1938)」という当時の写真集に残されている。

侵略者が侵略を解放と称するのは昔も今も同様であろう。もっとも、本来オーストリア人だったヒトラーを人々は真に英雄として迎えたのであろう。人々が望んだこととはいえ、このとき以来、オーストリアはヒトラーの権力下で悲劇への道を進むことになる。青年時代、美術への道に失敗し、失意の時にウィーンで過ごした彼は、故国を憎み、復讐を誓ったとも言われる。のちにブラウンシュヴァイク (Braunschweig) でドイツ市民権を得、解放者と称して故郷に帰ったヒトラーは両親の墓参りをし、首都ウィーンの王宮に進駐して、“併合” という形で故国に復讐をした彼の得意はこのときまさに絶頂であったろう。

2. ウィーンにおけるユダヤ人の略史

ヒトラーがユダヤ人に敵意を持ったのは、彼が美術学校の入試に2回も失敗したそのウィーン時代に始まるという。ここでヨーロッパにおけるユダヤ人の歴史と迫害の背景をくわしく論じることはできないが、ウィーンは全体としてはユダヤ人に対して寛容であったことが知られている。ウィーンにおけるユダヤ人の歴史の変遷を表1にまとめておく(資料3)。これを見ると、ヒトラーによるホロコースト (holocaust) 以前に、ウィーンからの2回にわたるユダヤ人追放が1420-21年と1670年に起こっている。かれらの置かれた差別的地位を端的に示すのは、1551年フェルディナント一世 (Ferdinand) によって発布された政令による目印であった。

表1 ウィーン市のユダヤ人略史 (資料3から)

西暦 1194年	Leopold 5世時代。市に住み着いたウィーン・ユダヤ人という名が初めて記録に出る。
1204年	初めてのシナゴグ (synagogue) が Seitenstettengasse 2番地に建てられ、人々はウィーン最古の Ruprecht 教会地区 Judengasse, Sterngasse を居住地区とし、さらに近辺に住居がしだいに拡がった。
1294年	新しいシナゴグを Judenplatz に建設。ユダヤ人居住区は低い塀で囲まれたが、まだ厳密に ghetto と言われるほどでなく、人々はまだ地区外で住む自由は持っていた。
1349/50年	市外 (現在の Goethegasse) にユダヤ人墓地を建設 (現在は遺跡としてのみ残る)。このあと、カトリック教会の命令でユダヤ人はキリスト教徒市民と厳密に差別され、その職業は金貸しに限られた。このことは市民のユダヤ人に対する敵意を助長した。
1420年	ウィーンからの最初のユダヤ人追放。多くの人は舟に乗せられ、ドナウ河を流れにまかせて放逐。一部の金持ちは逮捕され、金は没収。
1421年	残った約300人は、聖餐用のパン冒瀆の罪という口実で火あぶり死刑。シナゴグは破壊され、その石はI区 Dr. Ignaz-Seipel 広場2番地に建てられたウィーン大学の建設に用いられた。
1500年代終わり	その後、ユダヤ人に対する一般の反感は続いたが、この頃再び多数のユダヤ人が市内に住むようになった。
1624年	Ferdinand 2世の勅令が出され、ユダヤ人の権利が定められた。すなわち、市壁外の一定地区 (現在のII区) Grosse Sperlgasse に居住区が定められ、そこは Im Unteren Werd (現在の Leopoldstadt) と呼ばれた。
1660年	1624年当初、住民数は約300人であったが、この年には1,300人余りに達した。住民の大部分は商人で、Ruprecht 教会の近くに店を持ち、その社会ではある程度自治が認められた。当時の有名なラビには Yomtov Lipman Heller らが居た。しかし、そのご市民の反ユダヤ感情は再び強くなった。
1670年	Leopold 1世は信仰心があつく、カトリック教会の要望を聞き容れ、この年の2月、法令を発布し、トルコのスパイ、マリア冒瀆の罪を着せて居住ユダヤ人を追放。シナゴグは Leopold 教会と命名。しかし、ユダヤ人追放によって多額の税金収入が無くなり、貿易が低迷し、ユダヤ人とともに帝国から金も消失したことを皇帝は知った。そこで、商人と

銀行家だけに帰るよう命令し、彼らを Hoffaktoren (宮廷業者) とよび、多額の金と引換えに特権を与えた。もし、金が払えなければ追放した。Samuel Oppenheimer らの富裕なユダヤ人たちはトルコ戦争の費用を負担したり、バロック・ウィーンの建築資金を出した。

- 1686年 IX区 Seegasse の土地を Samuel Oppenheimer が買い取り、ユダヤ人墓地を建設(1784年、Joseph 2世の命令で閉鎖、ナチス時代に大部分破壊されたが、戦後修復)。
- 1782年 Joseph 2世は勅令(寛容令)を出し、富裕な宮廷商人のみにある程度の権利を保証した。すなわち、形式上の信仰の自由、職業の自由あるいは子弟を大学に進学させる自由であった。なかには爵位を与えられた、Rotschild (Rothschild) のような者もあった。かれらは、財力と社会的地位により、ウィーンの文化の発展に大いに貢献した。しかし、一般のユダヤ人は市壁の外にのみ居住を許された。彼らものちに Leopoldstadt 地区に徐々に移ったが、その際、多額の金 (Bollettentaxe, 関税支払い税) を支払わなければならなかった。
- 1824-26年 Seitenstettengasse 4番地に、現在も残るシナゴグが建てられる(図1)。外観ではそれと判らぬようにしなければならなかったが、そのお蔭で1938年ナチスによる破壊を免れた。
- 1852年 1848年の革命の4年後、物理学者 Adolf Fischhof ら知識人たちの闘いの成果により、ウィーンのユダヤ人社会が確立。皇帝 Franz-Joseph の許可で第二のシナゴグを建てることになり、Leopoldstadt の Tempelgasse に1854-58年に完成。しかし、1938年に破壊された。
- 1867年 憲法により、ユダヤ人はオーストリア社会に正式に受け入れられ、市民権をえた。これにより、政治、文化、経済において活動する道が開かれるとともにユダヤ人社会は発展し、著しく人口が増加した。この間、ユダヤ人は帝国に多大な貢献をし、例えば環状道路沿いの主な建物の建設など、「ウィーン文化はユダヤ人が造った」といわれるに到った。
- 世紀末以後 しかし、世紀末とともに Habsburg 帝国が衰退し、ユダヤ人の地位も次第に危うくなるとともに、再び反ユダヤ主義が台頭、1938年のナチスドイツによる併合とともに破滅の道をとるに到った。



図1 ウィーンの Seitenstettengasse のシナゴグ玄関
(筆者写す, 1994)。

すなわち、ユダヤ人を他の市民から区別するために顎髭を生やし、特別な黒の鍔広帽子を被り、そして丸い黄色の印を衣服に付けることが強要された。この黄色印は、のちにナチスにより“黄色星”に変わった。

アンシュルスの際、ユダヤ人は職を追われて雑役に服せられ、学校、教会は閉鎖、大学進学は禁止され、ダビデの黄色星を付けた。はじめナチスは彼らに移民として他国に去るよう奨励したという。彼らは財産を放棄し国際機関の助けでウィーンを去ったが、その数は13万人で、そのうち3万人は米国に移住した。残った約5万5000人は強制収容所に送られ、そのうち生存したのは僅かに2000人だけであった。1938年以前に登録されたウィーンのユダヤ人は18万5000人であったが、他国に移住した人たちの多くは戦後ウィーンに帰らず、1991年現在の登録ではわずか7,000人に過ぎない(資料3)。

3. ウィーンの文化を支え、発展させたユダヤ知識人たち

ヨーロッパの他の国と比べると、ウィーンのユダヤ人には成功者が多く、各界で活躍した人物が多い。表2に纏めたように、政治、医学、自然科学、芸術、文学、哲学、ジャーナリズム、あるいは映画界で19-20世紀に活躍した著名人が多い。これは、ハプスブルク帝国の歴代皇帝がユダヤ人たちを比較的寛容に処遇したためであろう。とくに、19-20世紀にはユダヤ人による“ウィーン文化”は、これらの優れたユダヤ系の人たちによって華々しい発展を遂げた。1867年の自由獲得により、ウィーンのユダヤ人人口は急速に増加した。これは、優れた能力をもったユダヤ人たちが他国から流入したことや、1881-82年のロシアにおける大迫害（ポグ

表2 世紀末から20世紀にかけてウィーンで活躍したユダヤ知識人たち（資料3などから）。

政治・社会	Victor Adler, Otto Bauer, Hugo Breitner, Robert Danneberg, Julius Deutsch, Julius Tandler, Theodor Herzl
哲 学	Ludwig Wittgenstein, Karl Popper, Martin Buber
ジャーナリズム	Karl Aussch, Friedrich Austerlitz, Anton Kuh
文 学	Karl Kraus, Jakob Wassermann, Felix Salten, Franz Werfel, Stefan Zweig, Franz Kafka, Josef Roth, Hugo Bettauer, Jura Soyfer, Elias Canetti, Fritz Hochwälder, Friedrich Torberg, Hilde Spiel, Vicki Baum, Hans Weigel, Peter Altenberg, Arthur Schnitzler, Hermann Bahr, Hugo von Hofmannstahl, Richard Beer-Hofmann, Alfred Polgar, Egon Friedell
音 楽	Gustav Mahler, Arnold Schönberg, Erich Korngold, Alexander Zemlinsky, Oscar Straus, Emmerich Kálmán, Leo Fall, Edmund Eisler, Johann Strauss#
絵 画	Gustav Klimt, Oscar Kokoschka, Egon Schiele, Max Oppenheimer
映 画	Max Reinhardt, Fritz Kortner, Leopold Lindtberg, Erich Pommer##, Erik Charell##, Billy Wilder###, Fred Zinnemann###, Otto Preminger###, Josef von Sternberg###
自然 科学	医 学 Sigmund Freud, Leopold Fraud, Emil Zuckerkandl, Ernst Fuchs, Josef Breuer, Carl Sternberg, Julius Schnitzler, Ludwig W. von Mauthner, Ernst Löwenstein, Robert Barany*, Otto Loewi*, David Gruby, Josef Halbans, Adam Politzer, Wiktor E. Frankl
	物 理 学 Lise Meitner, Wolfgang Pauli*, Felix Ehrenhaft
	生 化 学 Max F. Perutz*
	植 物 学 Julius von Wiesner
	化 学 Fritz Feigl, Leo Grünhut, Edmond von Lippmann, Otto von Fürth
	天 文 学 Samuel Oppenheimer
	自動車発明 Siegfried Marcus

注 # Johann Strauss の場合、祖父母がユダヤ人だったが、このことをナチスは無視し、彼とその家族の音楽演奏は禁止されなかったという。

1930年のドイツ映画「嘆きの天使 (Der blaue Engel)」の監督 J. Sternberg, プロデューサーの Erich Pommer はアメリカへ亡命し、旅回りの劇団の団長を演じた Kurt Gerron はアウシュヴィッツで殺された。また、1931年に作られた「会議は踊る (Der Kongress tanzt)」はドイツでは上映禁止となった。この映画のプロデューサーの Pommer, 監督の Erik Charell はアメリカへ亡命、出演俳優で Metternich を演じた Conrad Veidt は妻がユダヤ人だったためにアメリカで亡命した。また、Metternich の侍従を演じた Otto Wallburg は Gerron と同じく強制収容所で殺害された。非ユダヤ人で、主役の手袋売りの少女を演じた Lillian Harvey, ロシア皇帝を演じた Willy Fritsch はナチスに協力させられた。

のちにハリウッドで活躍した。Sternberg 監督はアメリカでドイツ出身の Marlene Dietrich と多くの映画を作って名声を馳せた。上にのべた Veidt はアメリカ映画「カサブランカ (Casa blanca)」でゲシュタポの少佐を演じた。

* ノーベル賞受賞者

ロム、Pogrom)で数100万人のいわゆる「東方ユダヤ人」が西方に逃れ、その多くがドイツやウィーンに流入したことにもよっている(大沢武男, 1995)。資料3によると、1857年にはウィーン市の人口のうち、ユダヤ人の占める割合はわずか2パーセントだったが、1910年には市の人口210万人の8.6パーセント、すなわち18万人以上まで増加した。ウィーン文化に貢献した知識人、銀行家、実業家をのぞく、ユダヤ系住民の三分の一にあたる5-6万人は貧しい人たちで、市の労働者居住地区に住んでいた。

彼らの知的活動を示すもう一つの指標は大学である。すでに述べたように、20世紀はじめ、ウィーン大学の学生の25パーセント以上はユダヤ人で、とくに法学部、医学部(ドイツの大学も同様)で彼らは多数を占めていた。このように、ウィーンにおける一般市民の生活は、医師、弁護士、ジャーナリスト、学校のいずれをとってもユダヤ人抜きでは考えられない状態にあったといえる。しかし、とくに東方ユダヤ人は貧乏で、このため犯罪も増加した。こうして、エリートも犯罪者もユダヤ人が多くを占めるという現実には置かれた一般市民の前者に対する“嫉妬”と、後者に対する“嫌悪”は、ナチスのユダヤ人追放やホロコーストを市民たちが是認する背景となっていたことは否めないであろう。「オーストリアはヒトラーの侵略戦争の最初の犠牲者であり、その後のナチズムの犯罪に対する責任は問われない」とした、米、英、ソ首脳による「モスクワ宣言」(1943年)によってオーストリアの法的立場は確立された。しかし、ワルトハイム(Waldheim)事件でもわかるように、「オーストリアは犠牲者であっただけでなく、ナチズムに対する自発的な奉仕者でもあった」という加害者責任もあるのではないかと、という悩みももっている(朝日新聞, 1995年8月5日)。

ウィーンを去った、あるいはのちに述べる、ドイツを去ったユダヤ知識人たちの多くがアメリカに移住、亡命したことは前述のとおりである。これら、ウィーン文化を担った人たち、ドイツの科学・学問を担った人たちがアメリカに移って活躍した、という事実は、ドイツ圏の大損失であり、結果論ではあるが、この点だけでもナチズムとこれを是認し、むしろ利用したドイツ国民、知識人の責任は大きい。その反面、これらの優秀なユダヤ人たちを受入れ、活躍させたアメリカが望外の利益を得たことに疑いはない。大戦後の覇権国アメリカの国力・財力・科学の突出はウィーン、ドイツなどから流入したユダヤ人エリートに負うところが極めて大きいといわざるをえない。

以上述べたように、過去に不幸な時代があったが、ウィーン歴史とユダヤ人は切っても切れないつながりを持っている。この両者の緊密な関係を記録に留めるため、博物館を設立するという考えがウィーン市長ツイルク(Helmut Zilk)から提案され、1990年、「ユダヤ博物館」が市の中心部ドロテア街(Dorotheegasse)に設立された。

4. ドイツにおけるユダヤ人問題

第1次、第2次ユダヤ戦争の結果、ディアスポラ(Diaspora)によって四散したユダヤの民は一部は西に(ローマ帝国、イタリア、スペイン、ポルトガル、北アフリカのアラブ諸国など)、

そして他は北方へ（フランス、ドイツ、ポーランド、ロシアなど）へ逃れた。その放浪は長く続いたが、9-11世紀のフランク（Frank）王国時代、比較的平和で恵まれた時を得た。しかし、第一回十字軍（1096-99）の始まったころには多くのユダヤ人が殺された。ユダヤ人虐殺の始まりである。そしてユダヤ人の「金貸し」が定着し、1215年の第4回宗教会議で、ユダヤ人をキリスト教徒から隔離することが決められた。この頃、ユダヤ人像が成立し、(1)キリスト殺し、(2)高利貸し、と規定されたため、不正な財産は奪い取っても良い、という思想が生まれた。これに先立ち、1179年には次のような法王の禁止事項が発布された。すなわち、(1)全てのキリスト教徒はユダヤ人と同席、飲食してはならない、(2)ユダヤ人の結婚式や祭儀に参加してはならない、(3)ユダヤ人はキリスト教徒の通う公衆浴場や酒場に行ってはならない、(4)ユダヤ人の店で肉や食料を買ってはならない。このほか、もしユダヤ人がキリスト教徒と性交すれば火あぶりの刑に処する、などとなった。

ヨーロッパ各地にゲットー（ghetto）が設置され、ユダヤ人はキリスト教徒から隔離された。反面、ある程度の自治権も認められ、ユダヤ教会（シナゴグ）が設置された（図2）。しかし、1290-1306年の頃、イギリス、フランス、スペイン、ポルトガル、オランダなどでユダヤ人追放令が出され、彼らは再び放浪を余儀無くされたが、オーストリア、ハンガリーやボヘミア、モラヴィアなどでは多少の保護を受けた。ローマカトリックに反対した宗教改革者であるルター（M. Luther, 1483-1546）は、ユダヤ人をキリスト教に改宗させようとしたが、失敗し、これがルターをしてユダヤ人を憎悪せしめることになった。そして、その著書「ユダヤ人と彼らの虚偽について」において、いかにユダヤ人を迫害すべきかを具体的に示した。

プロイセンのフリードリヒ大王（在位 1740-86）時代、ドイツにおけるユダヤ人を第1階級から第6階級まで分けて、それぞれの権利・義務を規定した。しかし、このほか何らの権利も持たず、保護も得られない放浪者、乞食も居り、盗賊、追いはぎを働いた者もいたので、ユダヤ人像が悪化した。フランス革命後、1792年からドイツはフランス革命軍に占領され、ナポレオン法典によってユダヤ人の平等が認められた。しかし、これも1814-15年のウィーン会議（Wiener Kongress）によって破棄され、19世紀には数百万人のユダヤ人がアメリ



図2 プラハ（Prag）のユダヤ人墓地。ヨーロッパ最古（13世紀建設）のシナゴグがある。限られた土地のため墓石は何重にもなっている（筆者写す、1984）。

カなどに亡命移住した。反面、ドイツにおける 19 世紀の産業革命には富裕なユダヤ人が大きな役割を演じ、近代資本主義国としてのドイツの発展に尽くした。

第 1 次世界大戦では、全ドイツ軍の 17 パーセントにあたる 10 万人のユダヤ人が兵士として戦い、1 万 2 千人が戦死、1 万 5 千人が勲一等十字章を授けられた。こうしてこの当時ドイツにおけるユダヤ人はワイマル (Weimar) 時代の「ユダヤ人天国」と言われる平和な一時期を得た。また、外務大臣にユダヤ人のラテナウ (W. Rathenau (1867-1922)) が任じられたが、右翼に暗殺された。この頃、ドイツにおけるユダヤ人の 3 分の 1 近い 17 万人はベルリンに居住していた (大沢武男, 1995)。そしてドイツにおけるユダヤ人の数については一般につきのよう

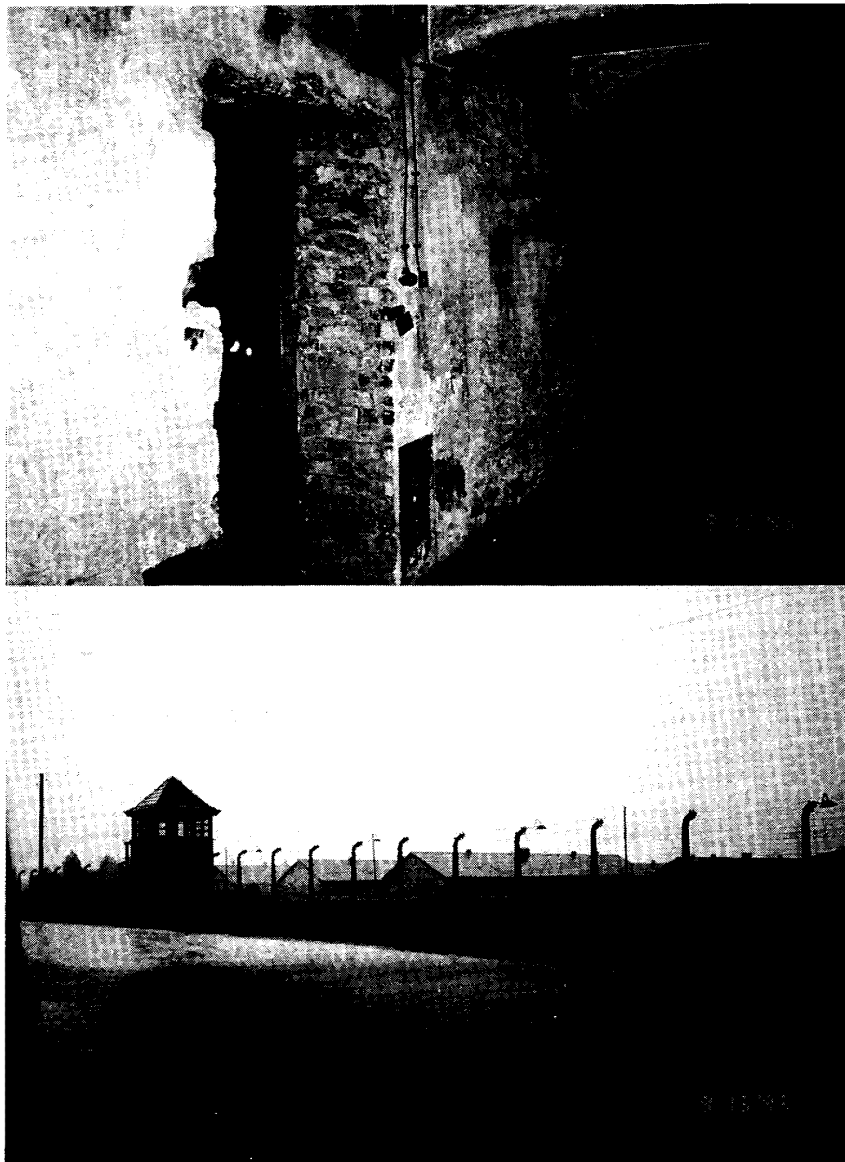


図 3 ドイツの強制収容所(現ポーランド)。上：Auschwitz のガス室(右)と死体焼却室(左)。釜には蠟燭が灯してあった。下：Birkenau 収容所。ここは Aushwitz の 10 倍の規模で、Auschwitz にはポーランド、ロシア、チェコなど、非ユダヤ人が主として収容され、多くのユダヤ人は Birkenau に収容された (筆者写す, 1995)

人の数は約 50 万人で、戦争勃発の 1939 年には約 22 万、アンシュルス後のオーストリアのユダヤ人を併せても 28 万人に減少、戦後にはわずか 1 万人余りとなった。戦後イスラエル政府は、ナチス (Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei-NSDAP) のため全ヨーロッパで 6 百万人のユダヤ人が殺されたと発表した (村松 剛, 1963) (図 3)。

以上がドイツにおけるユダヤ人の変遷の概略である。金貸しに始まる彼らの経済的活動は、ロスチャイルド家 (Rothschild) などの財閥を生み、これらがドイツ帝国に寄与するとともに、富裕な家族からは多くの優れた人材が排出した。それは、(1)経済的に豊かで、知的水準が高かった、(2)多くはベルリンなど、都会に居住し、高度の文化に接していた、(3)才能のある子弟には金と努力を集中し、育成した。その結果、高い教育水準を持ち、とくに医学、法学の分野で多くのユダヤ人が活躍したことはオーストリアの場合と同様であった。そのピークは第 1 次世界大戦からワイマル時代であって、たとえば 1913 年のフランクフルト市では弁護士は 218 名中ユダヤ人は 133 名 (62.5%) で、医師は 405 名中 147 名 (36%) であった (大沢武男, 1991)。ナチス時代 30 万人のユダヤ人がアメリカに逃れたため、ドイツの学問は著しい損失を被ったことはさきに述べた。これを示す一つの例がある (表 3) が、これほど顕著な事実は他に例を見ないだろう。ナチスを逃れたドイツの科学者が、アメリカに移って業績を挙げ、ノーベル賞を得たことがはっきり判る。表 4 にその例を纏めておく。これらのユダヤ人科学者のみならず、非ユダヤ人科学者のなかにもナチズムを嫌ってアメリカなどに逃れたものもあり、ドイツの損失とアメリカの利益をさらに強めた。

表 3 ドイツとアメリカにおけるノーベル物理, 化学, 医学賞受賞者の変遷 (丸山, 1990, 大沢, 1991, 山本, 1985 などから)。

	1901-39 (38 年間)	1943-55 (13 年間)
ド イ ツ	35 人	5 人
ア メ リ カ	14 人	29 人

表 4 1933-35 年にドイツを去ったノーベル賞受賞ユダヤ人科学者 (Beyerchen, 常石, 1980 から)

物 理 学	Albert Einstein* Otto Stern*
医学, 生化学	Max Born* Fritz Haber* Richard Willstätter** Heinrich Wieland* Otto Meyerhof* Hans Krebs*** Fritz Linpmann*

Gustav Herz, Otto Warburg はドイツに留まった。
*アメリカへ, **スイスへ, ***イギリスへ。

5. なぜヒトラーはユダヤ人の抹殺を計画したか

今までに述べてきた「ユダヤ人」とは一体どのような人々であろうか。ユダヤ人と非ユダヤ人の区別は、1935年9月16日に公布された「ニュールンベルク法」まではかなり曖昧なものであった。この法律により「ユダヤ人」は次のように定義された。(1)4人の祖父母のうち3人がユダヤ教徒であった場合には本人はJude(ユダヤ人)、(2)祖父母のうち2人がユダヤ教徒で、本人も教徒であればJude、(3)(2)の場合でも、本人が教徒でなければ一親等ユダヤ系混血児(Judisch)、(4)祖父母の1人が教徒で、本人が教徒でない場合は、二親等ユダヤ系混血児。はじめ、混血児はドイツ国民として扱われ、ユーデのみがユダヤ人とされたが、のちに急進派の要求により、混血児もユダヤ人とされ、迫害から逃れられなくなった。

このような、ヒトラーナチスの「ユダヤ人抹殺」の思想はどこから発したか、については議論が必ずしも一定しなかったが、東西ドイツ統一後、多くの歴史家の見解は変わりつつあるようである。従来、多くの専門家は、ドイツにおける「ユダヤ人抹殺」を完全にヒトラー個人に帰している傾向があったが、異なった見解もある(村瀬興雄, 1968, 1977)。前者の見解は、とくにユダヤ人のヒトラー憎しの感情を代表するイスラエルのほか、アメリカその他ヨーロッパの反ナチ主義者が一般に主張していたもので、日本でもこの見解をとる人は多かったと思われる。専門家による論争については村瀬興雄教授の論説に詳しいので(1994, 1995)、ここでは一、二の例を紹介するに留めたい。まず、この対立する見解についてここで概観したい。例えば前者の見解によると、ヒトラーのユダヤ人憎悪は青年期からはじまり、ベルリンの総統官邸地下壕で「ユダヤ人に対する容赦のない戦い」を国民に義務づける遺言を残して自殺するまで終始一貫していた、という。これに対し、村瀬教授は、“この絶滅計画については、ヒトラーの口頭命令が存在することを示す証拠が全く存在しないので、疑問の余地のない結論は出せないが、周囲の状況に押されて関係者のユダヤ人迫害がエスカレーし、ヒトラーもこの政策に賛成して、その時どきの支持や命令を与えていたと考えた方が無理がないと思われる”(村瀬興雄, 1977)という。また、村瀬教授(同上書第16版あとがき, 1990)によると、“ナチス党は、官僚、軍部、大資本、中間階級層、労働者、農民の間に深く食い込んだ、もっとも均衡のとれた国民政党であったことが明らかになりつつある”という。さらに“ヒトラーが「有能だが比較的弱い独裁者」であり、ナチス政権とナチス党自身の性格もまた多元的であったとを認めた時に、はじめてすっきりと理解される”(村瀬興雄, 1994)ともいう。実際、戦争末期には、強制収容所付属の多数の工場が新しく設立され、大企業の経営の下に、武器の生産、軍事的土木事業に力を傾けていた。ユダヤ人の労働力もむしろこのために利用されていたのである(村瀬興雄, 1994)。同教授の見解によれば、ドイツ国民はナチス党の政治によっていろいろな恩恵を受けており、ヒトラーはその意味において国民の支持を受け、その政策、命令は多くの国民の意志であったのも言えよう。実際、ヒトラーの異常なユダヤ人憎悪はドイツやオーストリアにおける反ユダヤ主義の伝統がその源流となっており、この反ユダヤ主義の伝統がナチズムに直結

するものであるにちがいない。ドイツを含むヨーロッパの歴史と伝統がヒトラーを生み出したのであって、あるとき、突如として独裁者ヒトラーが現れ、その「異常心理」が全ドイツを支配し、人びとが考えもしなかったユダヤ人絶滅命令”を出したとはとても考えにくい。20世紀ロシアのボグロムはじめ、中世以来のヨーロッパ各地におけるユダヤ人迫害や虐殺は数限り無く発生してきたが、最近おこった大規模ホロコーストとしてヒトラーがスケープゴートのように、全ヨーロッパを代表して弾劾されている、ともいえよう。

ただし、ドイツがユダヤ人絶滅を掲げるナチズム信奉に至る道は、他のヨーロッパ諸国とは異なる面をもっているように思える。これについて、ナチスが政権を得て2年後の1935年に発刊されたプレスナー (H. Plessner) の“遅れてきた国民〔和訳：ドイツロマン主義とナチズム (松本道介訳) (Die verspätete Nation) ”に述べられている見解は誠に興味深い。その要旨を筆者なりに紹介したい。数多くの小国に分裂していたドイツではもともと国家理念が欠けており、アウグスブルク宗教和議 (1555) で領主が宗派を選ぶことになり、宗教が地域によってさまざまに分かれる結果となった。このため、宗教心のあつい人々は国教会から疎外され、それゆえに世俗の場を求める傾向を生じた。その結果、18世紀後半以後、教会よりもむしろ、学問と芸術という自由な職業が真の信仰をもった人間に名誉をもたらせた。こうして信仰では宗教的エネルギーを十分に発揮できなかったドイツ人は文化のなかに世界観的な深みを求め、そのロマン主義的世界観文化の代表として哲学と音楽を持った。そして、19世紀以後、歴史的関心の引き受け手となった学問にならった発展史的構造理論のなかに地盤を見出した。反ユダ

表5 ヒトラーのユダヤ人抹殺までの経過

1919年	ドイツ労働党 (DAP) に入党, ユダヤ人問題に取り組始める。
1920年	DAP は国民社会主義ドイツ労働党 (NSDAP, ナチ党) と改称。夏, ミュンヘンのビアホール Hofbräuhaus におけるナチ党大集会で反ユダヤ主義の演説, 「ユダヤ人は死に値する」と述べた。
1921年	ヒトラー, ナチ党党首。
1923年	ミュンヘン一揆, 失敗。
1924-25年	獄中で「わが闘争 (Mein Kampf) 」(口述による)。
1928年	総選挙でナチ党議会へ進出。1932年にヒトラーはドイツ国籍を得る。
1933年	ドイツ政権を奪取
1934年	総統 (Führer) となる。民族衛生保健庁の一部にナチス人種政策局を置き, ユダヤ人政策に集中反ユダヤ規定により, ユダヤ人医学生に対する国家試験禁止令, ユダヤ人弾圧激化。
1935年	ドイツ人とユダヤ人との間の婚姻不許可。ベルリンでユダヤ人商店閉鎖命令 Nürnberg 法の制定。
1936年	ベルリン・オリンピック。ヒトラー, 党大会で「4ヶ年計画」宣言, 戦争準備。
1937年	秘密演説でヒトラーはユダヤ人追放決意を表明。
1938年	水晶の夜 (Reichskristallnacht) テロ・ユダヤ混血者は今後ユダヤ人と同等とみなすことになる。
1939年	帝国議会においてヒトラーは「(ヨーロッパにおける) ユダヤ人の絶滅」を予告。チェコを占領。9月1日ポーランドへ侵攻, 世界大戦始まる。
1940年	デンマーク, ノルウェー, ベルギー, オランダ, パリを占領。
1941年	バルバロッサ (ソ連侵攻作戦) 開始。一千万以上のユダヤ人殺戮の方法を考案。アウシュヴィッツ強制収容所開設。ユダヤ人に黄色星印付加義務令。
1942年	ベルリンのヴァンゼー会議で, ユダヤ人の東方輸送 (殺戮) 決定, 毒ガス使用計画。400万人以上が殺される。
1944年	ヒトラー暗殺計画, 失敗。
1945年	強制収容解散。ヒトラー自殺, ドイツ敗北。

ヤ主義は人種生物学という現代の学問の中に避難した形の、市民社会によるユダヤ人開放反対運動であるという。

以上の解析に基づいたプレスナーの見解でさらに興味深いのは、ドイツ人とユダヤ人はある意味で似ているという。すなわち、「ユダヤ人とドイツ人は、両者とも“民族”であり、国家以上の存在なのである。両者ともに国家と幸福な関係を持つことができず、歴史から課せられた国家待望の状況のなかで、没落した繁栄の過去の証人であると同時に、今後来るべき世界秩序の保証者なのである。両者ともに不幸で、一昨日と明後日の民族であり、今日において安らぎを持ち得ない民族として偉大である」。つまり、ユダヤ人とドイツ人は歴史的共通項を持つため、かえって相反発すると解される。この間のヒトラーおよびナチス党の動きを表5に纏めておく。

6. ドイツにおけるユダヤ人科学者

ドイツにおける学問の中心は各地の大学であったことは勿論であるが、そのほかに、カイザー・ウィルヘルム研究所 (Kaiser Wilhelm) があった。この研究所は1946年以降マックス・プランク (Max Planck) 研究所として、その伝統は受け継がれているが、1911年、ベルリンのダーレム (Dahlem) にまず化学研究所が設立された。これは、無機化学、有機化学、放射化学、原子物理の4部門からなっていた。研究の自由はもちろん、予算と人事は部門長に一任されるという、いわば理想的な研究機関であった。有機化学の部門長ウィルシュテッター (R. Wilstätter) そして放射線物理の部門長マイトナー (L. Meitner) はユダヤ人であった。その後物理化学研究所、実験治療学研究所 (のちの生化学研究所) および生物学研究所、1930年には物理学研究所が設立され、アインシュタイン (A. Einstein) が所長に任ぜられた。1915年に設立された生物学研究所は5部門からなり、植物遺伝学 (コレンス, C. Correns), 動物遺伝学 (ゴルトシュミット, R. Goldschmidt, ユダヤ人), 動物細胞学 (ハルトマン, M. Hartmann), 発生学 (マンゴルト, Otto Mangold), 生理学 (ワールブルク, O. Warburg, ユダヤ人) があったが、5年後にさらに一般生理学 (マイヤーホーフ, O. Meyerhof, ユダヤ人) と組織培養学 (フィシャー, A. Fischer) が加えられた。このように設立当初は、所長、部門長にユダヤ人を招き、研究所は文字通りの科学のメッカであったが、ナチスが政権を得た1933年以後多くの指導的科学者を失った。この中でワールブルクは例外的に終戦までベルリンにのこり、安全に研究を続けることができた。それは、彼がガンの研究をしていたため、ナチ政府が特別に保護したからであったと伝えられている。

筆者の研究分野、植物生理学にもナチスのために迫害された例があった。植物の成長に関する研究で顕著な業績を挙げたブラウナー (Leo Brauner) 博士である。彼は1898年にオーストリアのウィーンで、富裕なユダヤ人自動車工場主の子息として生まれ、のちにベルリンに一家が移ったためベルリン大学に入学したが、第1次世界大戦開戦とともにオーストリア軍に入隊した。戦後復員し、ウィーン大学で植物学を学んだ。ドイツのイエナ大学で学位を得、ベルリ

ン大学助手に任じられた。さらに、1925年にイェナ大学助手となり、ここでレナー (Otto Renner) 教授 (のちにミュンヘン大学) のもとで講師資格を獲得した。レナー教授は学問を愛する優れた植物学者で、1933年ナチズムに同調した学生たちが大学からユダヤ人教員追放運動をしたとき、ドイツの科学がユダヤ人科学者の寄与によっていかに発展したかを学生に説いたという。この時期にユダヤ人を擁護することは容易なことではなかったと思われる。レナー教授の擁護にもかかわらずブラウナーは学生の要求に屈し、イェナ大学を去り、一時イギリスのオクスフォード大学に行ったが、トルコに移った。戦後の1946年にドイツに帰り、ミュンスター、グライフスワルト大学を経て、1955年、恩師レナー教授の後任としてミュンヘン大学に迎えられた。1962年春、筆者はミュンヘン大学にブラウナー教授を訪ねる機会を得たが、彼のもの静かな態度はユダヤ人科学者として



図4 ブラウナー (L. Brauner) 教授。ミュンヘン大学植物学教室にて (筆者写す、1962)。

て数々の辛酸を嘗めながらも、多くの優れた研究をなし遂げた年輪のような奥の深さを秘めた物腰が筆者には印象深かった (図4)。1968年に退官し、1979年、同地において80才で苦難の人生を終えたと聞く。筆者が接したことのある一人のユダヤ人植物学者である。そのイェナ時代に同僚の助手で、のちに“生理時計”の発見者として知られる優秀な植物生理学者ビュンニング (Erwin Bünning) 教授も、“zu rot”つまり“赤すぎる (共産主義に近い過度の自由主義)”という理由で学生に大学を追われた。この例でも判るように、ヒトラーの命令を受けるまでもなく、ナチ学生同盟は率先してユダヤ人を排斥したのである。

事実、1933年よりいち早く、ナチ学生同盟がアンチ・ボルシェヴィズムとアンチ・セミテイズムを標榜し、運動を開始した。その手始めが1933年5月、ベルリン、オペラ広場における焚書であった。フロイト、ハインリヒ・マンらユダヤ人の著書を多数炎に投じた。しかも、学長や教授までがこれら学生に迎合し、その反ユダヤ運動を支持するものが多かった。図5に示すのは「墮落した芸術」と称して開かれたユダヤ人芸術家の作品展覧会の案内書の中のページで、反共産主義、反ユダヤ仕儀が露骨に表現されている。

上に述べたレナー教授などはむしろ例外的な良心派であったと言えよう。1933年以後も多くの大学において教授団に反ヒトラーの抵抗運動は殆どどこにもなかった。チュービンゲン大学医学部では1933年早々、助手全員がナチ突撃隊に加入すらしている。

生化学の例をみよう。あるドイツの生化学雑誌の年間刊行ページ数は1932年をピークとし、

その後急低下している。これに反し、アメリカの生化学雑誌のそれは第2次世界大戦中も一定のレベルを保ち、戦後は急上昇した。これは1933年以後ドイツから優秀なユダヤ人生化学者が追放され、アメリカに亡命して活躍したからにはほかならない(丸山工作, 1990)。亡命者の中には、ドイツ生化学雑誌の創刊者ノイベルク(C. Neuberg, 1877-1956), マイヤーホフ(O. Meyerhof, 1884-1951), リップマン(F. Lipmann, 1899-1986)ら、ノーベル賞級の著名な生化学者が多数いた(前掲表4)。

つぎに物理学の例を見てみよう(前掲表4)。「ドイツ的物理学」を主唱した人物としてハイデルベルク大学教授で、ノーベル物理学賞受賞者レナート(P. Lenart, 1862-1947)がいる。彼は国粹主義者、反ユダヤ主義者で、アインシュタイン理論物理学を攻撃し続けた。さらにもう一人のノーベル物理学賞受賞者で、多くの大学で教授を勤めたシュタルク(J. Stark, 1874-1957)がいる。彼は「光量子仮説」をめぐる、アインシュタインと先取権争いによって仲違いし、その相対性理論やボーアの量子論を誹謗中傷し、「ドイツ物理学の危機」を出版した。こうして



図5 「墮落した芸術」展覧会案内書。見出し(左)とルクセンブルク女史を例に反共産主義、反ユダヤ主義を描写したページ。「娼婦も道徳的理想に昇華する」という表題のこのページで以下の説明が記されている。ボルシェヴィッキ主義者のユダヤ女ローザ・ルクセンブルク(Rosa Luxemburg*)はロシア小説を殊の外愛した。なぜなら、ロシア小説は売笑婦を高貴なものとし、彼女(ルクセンブルク)によって始められた社会の破壊活動に伴う満足感を彼女に与えるからである。それはまた彼女を、破壊の煉獄と魂の苦悩から道徳的純粋性と女性的な英雄精神へと高める(資料は故久米直之京大名誉教授提供)。
(注*: 1871-1919。ポーランドのユダヤ商家の出身。1897年にドイツに移住し、ドイツ社会民主党左翼急進派の指導者として頭角をあらわす。第1次世界大戦中にはリープクネヒト(Karl Liebknecht)とともにスパルタクス団を結成、ドイツ共産党設立に参加。1919年ベルリン蜂起で政府軍に捕らえられ殺害された。)

彼らは当時のユダヤ人および「白いユダヤ人（非ユダヤ人だがユダヤ人を差別しない）」の物理学者たちを弾劾し、追放に加担した。彼らの性格はきわめて狷介であったと言われ、反ユダヤ思想は感情的なもので、優れたユダヤ人物理学者の顕著な業績に対する嫉妬がその行動の原動力であった。彼らもその下劣な欲望と感情のため、ヒトラーの反ユダヤ政策を利用したと言えよう。

ドイツ文芸学や歴史学など精神科学の分野も、1933年以前から民族純潔主義の傾向を強く持っており、当然反ユダヤ主義であった。他の社会科学、人文科学の分野の教授たちも大同小異であったと思われる。1936年12月にはトマス・マン（T. Mann）がボン大学からその名誉博士号を剥奪されたことは有名な事件である。ツイーグラーは、ナチに取り入り、進んで自己統制したドイツの大学教授を次のように分類している（山本尤，1985）。(1)職業上、経済上の基盤を失いたくなかったもの。(2)学問上の成果の上らないことを、ナチズムのイデオロギーのなかで補償しようとしたもの。(3)いかなる犠牲を払ってでも、業績を上げて出世しようというむき出しの功名心にとらわれていたもの。(4)ナチ・イデオロギーを主観的にも心底から信じていたもの。

勿論、ナチズムに抵抗した大学教授たちもいた。その例はベルリン大学にあった「水曜会(Mitwochgesellschaft)」で（Scholder—中沢護人，1989）、一定数の会員が月に一回、順繰りに会員の家に集まり、話を聴き、食事をしたという学者サークルである。次第に反ヒトラーの傾向を強め、1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件に会員全員が連座し逮捕された。その大部分は死刑となったが、文化哲学者・教育学者シュプランガー（E. Spranger）教授は死刑を免れた。昭和12年ドイツ政府の文化使節として来日した縁で（神谷宣郎，1989）、日本政府が同教授の助命を嘆願した結果と言う。

む す び

19-20世紀、とくにこの20世紀は人類の歴史にかけて無い事件の連続で世紀末を迎えている。その最たるものは戦争と革命であって、人類は未曾有の苦難の時を経験し、いまだに経験しつつある。2000年前に国を失い、なおかつこの長い年月の間、民族の文化、宗教を、あらゆる困難のもとで保持したユダヤの民の生き方は凄まじく、特異である。しかも、あらゆる分野で第一級の仕事をなし遂げ、戦後超大国となったアメリカでは経済、社会、科学、政治、外交に大きな影響を及ぼしているユダヤ財閥の力は文字通り世界を支配しているとも言える。しかるに戦後ナチズムの残虐性を糾弾し、イスラエルを建国したユダヤ人が今度は同じ暴力によってパレスチナの人々に残虐な行為をしているのはなぜだろうか。われわれ日本人が忘れてはならないのは、第2次世界大戦中、亡命したアインシュタインがルーズベルト大統領に原子爆弾製造を進言し、またデンマークの著名なユダヤ混血原子核物理学者ボーア（N. Bohr）が、ドイツに遅れぬよう英米の政府と物理学者に原子爆弾の開発を推進するよう再三再四督促したことである。これはボーアのもとで研究したドイツの天才的物理学者ハイゼンベルク（Werner

Heisenberg) がナチスに協力して原子爆弾の開発に従事していると思ったからである。ドイツにおくれを取ることを恐れ、多くのユダヤ人亡命物理学者の協力も得た米政府は、マンハッタン計画により原子爆弾の製作に成功した。ドイツが敗れ、もはや原子爆弾使用の必要がなくなったにもかかわらず、そして計画に携わった科学者でさえその使用に反対したにもかかわらず、アメリカは 1945 年 8 月、広島と長崎にこれを投下し、数十万人の非戦闘員が非人道的に殺戮された。マンハッタン計画のリーダーはアメリカ生まれのユダヤ人物理学者オッペンハイマー (J.R. Oppenheimer) であった。ナチスによって引き起こされたユダヤ人ホロコーストがもっとも最近の出来事で、余りにも強く人びとを印象づけているためにロシアのポグロムはじめ、過去における各地のユダヤ人迫害あるいは戦後のユダヤ人によるパレスチナ人迫害が忘れられている傾向はないだろうか。同時に日本人だけが洗礼を受けた原子爆弾投下によるホロコーストの事実をアメリカ人はもとより世界中の人類はもっと深刻に認識しなければならない。

自らの嫉妬と欲望という低次元の動機によってナチズムに協力し、ライバルをナチスの名によって追放した人々、これに復讐するため原子爆弾をナチスの同盟国国民に投下するという、いずれも劣らぬ卑劣な非人道的行為は平等に責められるべきであろう。筆者は、これとは次元は異なるが、1969-70 年我が国で荒れ狂った大学紛争の頃、同質の卑劣で陰湿な人間の性のやりきれなさを見た。大学改革の名のもとに、権力も実績も持たない一部教員が学生の改革運動に便乗し、自らの欲求不満を紛争によって解消しようとしていたことは見逃せない。「研究は犯罪的」と称し、優秀な教授や第一線の研究者を、反革命的、犯罪的と、団交などで弾劾し、研究室を封鎖するなどしてその研究を妨害した事実は忘れがたい。同質の人間の卑劣さは、いま世界のあちこちで起こっているいろいろな出来事背景にあるのではなからうか。ヒトラーの悪行を非難し、弾劾するならば、表に現れた事象だけにとらわれることなく、その背景にある事の本質を見失わないようにしたいものである。

謝辞

ほぼ半世紀、筆者が旧制高等学校の理科学徒時代、西洋史を講義し、その時以来現在に至るまでの長年月、個人的に歴史や科学の本質を親身にご教示下さり、さらに拙い本稿を通読、ご批判頂いた筆者の恩師、ドイツ現代史の権威である村瀬興雄先生に厚く御礼申し上げます。

付記

本文中、数字や重要な見解を引用した場合は資料や当該文献などの原典を記した。その他の場合は末尾の文献を参考にしたが、文中に一々原典を記さなかった。

資料

1. UNI Präsent, 625 Jahre Universität Wien Archiv der Universität Wien, 1990
2. UNI Präsent, Vertriebene Intelligenz. 2 Auflage. Archive der Universität Wien, 1993
3. Jewish Vienna, Heritage and Mission, Wien, 1994
4. Entartete "Kunst," Ausstellungsführer, 1938

文 献

- 赤間 剛「ヒトラーの世界——ナチズムの思想的核心理とはなにか」三一選書, 1977。
- Bettelheim, B. (森泉弘次訳)「フロイトのウィーン」みすず書房, 1992。
- Beyerchen, A.D. (常石敬一訳)「ヒトラー政権と科学者たち」岩波現代選書, 1980。
- Bünning, E. [Fifty years of research in the wake of Wilhelm Pfeffer. Annual Review of Plant Physiology 28 : 1-22, 1977.]
- Clare, D.G. (兼武 進訳)「ウィーン最後のワルツ」新潮社, 1992。
- Dimont, M.I. (藤本和子訳)「ユダヤ人——神と歴史のはざまで」上, 下, 朝日選書, 1986。
- 土井敏邦「アメリカのユダヤ人」岩波新書, 1991。
- 江上照彦「会議は踊る」南窓社, 1967。
- 幅 健志「会議は踊る——帝都ウィーン物語」三省堂, 1989。
- Haffner, S. (山田義顕訳)「ドイツ帝国の興亡——ビスマルクからヒトラーへ」平凡社, 1989。
- 林健太郎「ワイマル共和国」中公新書, 1963。
- 林 忠行「中欧の分裂と統合」中公新書, 1993。
- Heisenberg, E. (山崎和夫訳)「ハイゼンベルクの追憶——非政治的人間の政治的生涯」みすず書房, 1984。
- 平井 正「ゲッベルス」中公新書, 1991。
- Hofmann, H.H. [Hitler in seiner Heimat] Zeitgeschichte-Verlag, Berlin, 1938.
- 細川政則「ヒトラーとミュンヘン協定」教育社歴史新書, 1979。
- 猪木正道「軍国日本の興亡——日清戦争から日中戦争へ」中公新書, 1995。
- Irving, D. (赤羽龍太訳)「ヒトラーの戦争 (上, 下)」早川書房, 1983。
- 神谷宣郎「細胞の不思議——探究の後をふりかえって」なにわ塾叢書, 1989。
- 加藤雅彦「図説ハプスブルク帝国」河出書房新社, 1995。
- 小林正文「ヒトラー暗殺計画」中公新書, 1984。
- Krebs, H. (丸山工作・丸山 匠訳)「オットー・ワールブルク——生化学の開拓者」岩波書店, 1982。
- 熊谷 徹「ドイツの憂鬱」丸善ライブラリー, 1992。
- 丸山工作「生化学の黄金時代」岩波書店, 1990。
- 丸山工作「生化学の夜明け」中公新書, 1993。
- 増田芳雄「植物学史」培風館, 1992。
- 増谷英樹「歴史のなかのウィーン」日本エディターズスクール出版部, 1993。
- Mau, H., Krausnick (内山 敏訳)「ナチスの時代——ドイツ現代史」岩波新書, 1982。
- 望田幸男「ナチス追及」講談社現代新書, 1990。
- 森本哲郎「ウィーン」文芸春秋社, 1992。
- Morton, F. (高原富保訳)「ロスチャイルド王国」新潮選書, 1994。
- 村松 剛「ユダヤ人——迫害, 放浪, 建国」中公新書, 1963。
- 村瀬興雄「ヒトラー・ナチズムの誕生」誠文堂新光社, 1962。
- 村瀬興雄「ナチズム」中公新書, 1968。
- 村瀬興雄「アドルフ・ヒトラー」中公新書, 1977。
- 村瀬興雄「ナチス統治下の民衆生活——その建前と現実」東京大学出版会, 1983。
- 村瀬興雄「ナチズムと大衆社会——民衆生活にみる順応と抵抗」有斐閣, 1987。
- 村瀬興雄「拙稿 [ナチズムについての新しい考察] への補遺」現代史研究 40 : 54-68, 1994。
- 村瀬興雄「ヒトラー体制とドイツ(4)最新ナチス論。次第に明らかにされてきた第三帝国の性格」学研歴史群像シリーズ (42) [アドルフ・ヒトラー権力編] pp.154-168, 1995。
- 村山雅人「反ユダヤ主義——世紀末ウィーン政治と文化」講談社選書メチエ, 1995。
- 永井清彦「国境をこえるドイツ——その過去・現在・未来」講談社現代新書, 1992。
- 長田 弘「アウシュヴィッツへの旅」中公新書, 1973。

- 西尾成子「現代物理学の父ニールス・ボーア」中公新書，1993。
- 野村二郎「ナチス裁判」講談社現代新書，1993。
- 小此木啓吾「フロイト——その自我の軌跡」NHK ブックス（日本放送出版協会）1983。
- 大沢武男「ユダヤ人とドイツ」講談社現代新書，1991。
- 大沢武男「ヒトラーとユダヤ人」講談社現代新書，1995。
- Plessner, H.（松本道介訳）「ドイツロマン主義とナチズム」講談社学術文庫 1995。
- Powers, T.（鈴木主税訳）「なぜ、ナチスは原爆製造に失敗したか」上，下，福武書店，1994。
- 四宮恭二「ヒトラー・1932-34——ドイツ現代史への証言（上，下）」NHK ブックス（日本放送出版協会）1981。
- Scholder, K.（中沢護人訳）「ヒトラー政権下の水曜会（上，下）」1989。
- Schorske, C.F.（安井琢磨訳）「世紀末ウィーン——政治と文化」岩波書店，1983。
- Spiel, H.（別宮貞徳訳）「ウィーン，黄金の秋」原書房，1993。
- Stern, J.P.（山本 尤訳）「ヒトラー神話の誕生——第三帝国と民衆」そしおぶっくす（社会思想社）1983。
- 宝木範義「ウィーン物語」新潮社，1991。
- Trevor-Roper, H.R.（橋本福夫訳）「ヒトラー最後の日」筑摩叢書（筑書店）1975。
- 上田和夫「ユダヤ人」講談社現代新書，1986。
- Wandruszka, A.（江村 洋訳）「ハプスブルク家——ヨーロッパ王朝の歴史」谷沢書房，1982。
- 渡辺和行「ナチ占領下のフランス——沈黙・抵抗・協力」講談社選書メチエ，1994。
- 山口 定「ナチ・エリート」中公新書，1976。
- 山本 尤「ナチズムと大学——国家権力と学問の自由」中公新書，1985。
- 山之内克子「ウィーン——ブルジョア時代から世紀末へ」講談社現代新書，1995。
- 横山三四郎「ロスチャイルド家」講談社現代新書，1995。